

平成24年度 大学院工芸科学研究科 学位授与式（秋季） 学長告辞

本日、修士と博士の学位を取得されました皆さん、誠におめでとうございます。

京都工芸繊維大学を代表し、心からお祝い申し上げます。また、皆様をこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申し上げたいと思います。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に大学院を改組し、工芸科学研究科を設置しました。

本日皆さんには、修士学位 7224号から7242号まで、課程博士甲第647号から甲第651号まで、論文博士乙第185号から乙第186号までの学位を授与致しました。皆さんの研究業績は本学の知的財産に加えられ、提出して頂いた学位論文は広く人々に公開され、それぞれの分野における新たな展開のため、また技術革新や産業創出のために活用されます。さらに皆さんに続く後輩の研究のために利用されます。

学位を取得された皆さんには、今後、それぞれの分野においてその能力を発揮されることを希望しています。そして、特定の専門領域で研究テーマを深く極めることに主眼を置いた研究方法だけでなく、広い視野に立って、他の研究者との共同作業を心がけてください。そして自らの研究や仕事が、社会的にどのような役割を持つのか、社会にどのような影響を及ぼすのか、科学者として、技術者として、一人の人間として、社会的責務を果たすことを考えてください。

本学の卒業生は、これまでも、専門分野における基本知識と専門技能をよく修得し、優秀な技術者としてのキャリアを踏み出していきました。これは企業や社会から定評を得ている事実であり、私たちは、皆さんの能力や知識について、自信と確信を持っており、心配もしておりません。もし一抹の不安があるとするれば、それは、あなた方が、やり残した実験や資料収集のことではありません。そうではなく、自然や物質を相手にした仕事に熱中するあまり、人間とは何か、自分とは何か、愛とは何か、といった人間や社会にとって重要な課題を、ときには無意識に、ときには意識的に、面倒なものとして正面から向き合ったことがないのではないかという反省です。人間や社会について、深く悩み、自ら思考した時間の厚みが、専門分野の学習や研究に比して少ないのではないかという反省です。

（１）卒業生よ、強い人間になれ

我々を取り巻く状況は日々厳しさを増しております。東日本大震災の影響は日本全体に及び、社会・経済・科学技術に関して、根本から問い直さなければならぬ事態となっています。私たちは、既存の専門領域内の技術の積み重ねだけでは、解決できそうにない課題に直面しています。苦しくともまじめに努力すれば解決策に到達できるという幸せな状態にはない。理不尽で手ごわい課題に直面していることを認めなければなりません。そしてその原因の多くは、人間に関わるものであり、組織と法と価値判断に関わるものであります。今日、君たち卒業生を世に送り出すにあたって、専門領域以外の、現代社会の最も困難な存在、逃げることのできない課題である人間について触れないわけにはいきません。

そもそも、人間とは何か？ こうした問いに応える場合、旧来は、哲学的な洞察によって、「人間とは考える葦である」というパスカルのステートメント、あるいは、自分とは誰か？という問いかけに対して、「われ思う、ゆえにわれあり」というデカルトの省察をもって回答し、その後の歴史的展開を考察するのが普通であります。しかし、１９６８年以降、構造主義の台頭とともに、医学、生理学、心理学における観察データに基づき、より根源的な人間の像が提起され、人文社会学の諸領域を席卷していくことになります。これまでにない、厳しく苛烈な人間観が提起され、人間や社会の構築に関する議論に影響を与えています。我思う故に我あり、というデカルトが築いた「理性的人間」という像、これは正しい認識を積み上げることによって、正しい生活と良き社会を作り上げることができるという考え方です。これに対してフロイトは、精神分析を行う中で、さまざまな患者の語る言葉を聞き、夢や言い間違いや、自分でも意味の判らない行動など、主体による理性的な統制を受けない言葉の分析を行いました。その結果、無意識という領域を発見し、この無意識という、ひたすら満足を求め続ける欲動の領域こそ人間の本体であるという考えを打ち出しました。

良き人である自分と同様に良き隣人との間での友好関係をいくら分析しても、何も得られないのが今日の状況です。人間は、自分でも正視しがたい欲望を抱えた生き物であり、わがままであるだけでなく、危険な存在であることを受け入れなければなりません。この認めがたいほど過酷な事実をから目をそらさずに、受け入れることによって、人間として成長することができるのだと思います。

（２）京都工芸繊維大学とは何か ？

本日の卒業式に当たり、皆さんがこれまでに学び、人生の大切な時期を過ごされた京都工芸繊維大学について考えてみたいと思います。京都工芸繊維大学とは何であったか？

京都工芸繊維大学は、知と美と技を極める工科系大学である。あるいは、

京都工芸繊維大学は、京都高等工芸学校および京都蚕業講習所に端を発する 110 余年の歴史の中で、「知と美と技」を探究する独自の学風を築きあげてきました。この栄光の歴史に新たな一頁を加えるべく、豊かな人間性に基づく技術の創造をめざして技を極め、人間の知性と感性の共鳴を求めて知と美の融合をめざし、教育研究の成果を世界に発信していきます。これも一つの回答であります。これとは全く別の観点もあります。

私たちは一人一人、自分の名前を持っていますが、その名前は自分の外からやってきます。この事実には留意しなければなりません。自分の名前は、すべての可能世界を貫通する ID コードであり、死んだ後も自分を同定するために使用されます。固有名は私たちにとって、重要な役割を果たす単語であるにもかかわらず、自分とは無関係に、人生の初期条件として外からやってきます。そして我々は、一生をかけて自分の名前という箱の中身を埋めていきます。人生は外からやってきた名前という記号のコンテンツを作りつづける作業であるということもできます。

大学の名前も同じです。京都工芸繊維大学は固有名であり、これまで何千、何万という卒業生の皆さんが、一人一人の人生を費やして、その内容を作り上げてきた歴史的な構築物であります。大学名称は、我々にとっては外からやってきたものかもしれませんが、自分の名前と同様、分解したり改変したりすることは意味をなさないのであります。私の名前は、古山正雄といますが、これを分解して、古い山と正しい英雄と読み替えたところで、意味をなさない。固有名は、あくまでもフルヤママサオという一連の発音による一つの単語がすべてであり、分解や変換によって、情報が増えることも減ることもありません。京都工芸繊維大学も同じことであり、一つの発音、一つの単語であり、時代の変遷の中で、ああもあり得た、こうもあり得たであろうけれども、可能世界を通じて普遍の記号として、ID コードとしての役割を果たすものは、京都工芸繊維大学という一つの固有名なのであります。従って、京都工芸繊維大学の内容は、皆さん方一人一人の活躍の歴史、私たち全員の人生の集積地が京都工芸繊維大学の内容を形成し続けるのです。その意味で、逆に、京都工芸繊維大学とは何かという問いに対する答えは、皆さん方の将来にわたる活躍の集積を京都工芸繊維大学と呼ぶのだということになります。

(3) 大学を愛すること

結びに当たり、学長から卒業生諸君にお願いがあります。

皆さんが学び、青春の大切な時期を、人生の大切な時期を過ごした大学は、日々楽しい樂園であったでしょうか。多くの人は、苦しい修業時代と研究過程を乗り越え、今日のよき日を迎えられました。その意味では、達成感と満足感を持っておられると確信します。しかし、同時に、大学は青春の樂園というには、様々な不備な点や欠点もあり、皆さんに苦しみを与えたこともあるでしょう。それでもなお、私は、皆さん方が、卒業後も大学を愛することを心から願っております。

精神分析のステートメントの一つに、「愛は欠如の関数である」という名言があります。人を好きになる場合、彼は研究がよくできる、彼はお金持ちである、といった個別の理由を並べ立てても、好きになる理由を説明することはできません。人は利益のカatalogで人を愛するわけではありません。人は分析できない理由によって人を愛します。大学においても事情は同じであり、皆さんも理由なく、なぜか京都工芸繊維大学を好きになっていただきたいと思います。

母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。松ヶ崎の地において、私たちは常に世界とつながっており、皆さんを見守っています。皆さんは、私たち教育者の誇りであり、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って、卒業していただきたいと思います。

平成24年9月25日
京都工芸繊維大学長
古 山 正 雄